

令和元年度 学校評価計画書 河井小学校

重点目標	重点	具体的取組	主担当	年度後半の方針・方策	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	達成度(A+B)%		自己評価			学年末・次年度に向けての方針・方策
							中間	最終	中間	最終	総合	
1. 授業改善と学力向上	◎	①基本的な学習規律の定着	学びの基礎づくり部会 河崎	毎月、学習目標を掲示し、月末に点検を行った。担任からの声掛けもあり、意識して授業に取り組む児童が多かった。しかし、クラスによってばらつきもあったため、どのクラスでも意識して取り組めるように共通理解していきたい。取り組み結果を掲示し、可視化することで児童の意欲につながり、90%以上の児童が意識することができた。 2学期以降も児童の実態に合う学習目標を決め、学習規律の徹底を図りたい。	学年に応じた学習規律が身に付いている	A:90%以上の児童ができる B:80%以上の児童ができる C:70%以上の児童ができる D:70%未満の児童ができる	・職員③100% ・児童④97% ・保護者④78%	・職員 ③100% ・児童 ④97% ・保護者④80%	A	A	A	児童の実態に合わせ、足りない部分を学習目標として設定したことで、児童が集中して学習に臨める環境を整えていくことができた。また、結果を可視化することで、児童もより良い結果を出せるようにと目標を意識することができた。次年度もまた児童の実態に合わせた学習目標を設定し、学習規律の定着を目指していきたい。
		②学習準備の定着 (名札着用と筆記用具、道具袋に入れる物がそろっている)	学びの基礎づくり部会 河崎	毎月、学習用具の点検を行い、持ち物の過不足がある児童には担任から個別に声かけを行ったため、筆箱の中身が揃うようになってきている。また、学期初めに持ち物表を配布し、道具を揃えてから新学期を迎えられるように取り組んだ。しかし、シンプルな物やのりやペンなどの消耗品がなかなか揃わないところもあったため、引き続き持ち物の約束を確認した上で、持ち物表を配布したり児童への声掛けをしていきたい。	名札着用と筆記用具、道具袋に入れる物の準備がされ、その指導をしている	A:90%以上の児童ができる B:80%以上の児童ができる C:70%以上の児童ができる D:70%未満の児童ができる	・職員①100% ・児童②93% ・保護者②84%	・職員 ①100% ・児童 ②95% ・保護者②84%	A	A	A	毎月の学習用具の点検で持ち物を確認し、過不足なく筆箱の中身が揃っている児童が増えている。名札はほとんどの児童が着用できている。次年度も、児童が自分たちの持ち物を意識し、整理できるようにしていきたい。持ち物表を配布するとともに学習用具はシンプルなものを使用するという約束を共通理解していきたい。また、名前のない落し物が多くあるため、記名の徹底をしていきたい。
	◎	③表現する力の育成 (話すこと)	学びの基礎づくり部会 松本	友達の話を「あたたかな聴き方」で聴いて、自分の考えがどう変わったかを、変身Vを意識して使い、話すことができるようになってきた。授業の振り返りでも、変身Vで考えることで、今まで自分自身の学びの成果を感じていなかった児童も、「わかった！できた！なるほど」を感じるようになることができた。今後、さらに話を聴くことで、自分の考えが深まったり広がったりしたことを、発表したり書いたりできるように児童を目指していく。	自分の考えを伝え、つなげて話すことができる	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員④100% ・児童⑤80% ・保護者⑤77%	・職員 ④100% ・児童 ⑤81% ・保護者⑤79%	A	A	A	「あたたかな聴き方」「やさしい話し方」「学びの約束5か条」広まり深まりにアプローチできる反応「変身V」を職員で共通理解して取り組むことができた。授業での話し方や聴き方など学習基盤が整えられた。今後、自分の考えを表現するために、書くことと話すことが確実にできる手立てをしていく。そして、自分の考えと比べながら友達の考えを聴き、さらに付け足したり、書き直したりしたことを、説明することができる児童を目指す。学びが広がったり深まったりしたことを児童に価値づけし、自信を持たせ自己肯定感を上げていく。
	◎	④家庭学習の充実と習慣化 (低学年20分、中学年40分、高学年60分の定着)	学びの基礎づくり部会 谷口	自学ノートが1冊終了した際に、かじこ山遊園地に自分の分身を張る取り組みを継続して行っている。今年度は、かじこ山遊園地をより豪華にし、児童の意欲が高まるようにしている。また、児童が予習を行うことができるよう、予習の手引きを低学年用と高学年用に分けて作成した。今後も、児童が意欲的に復習や予習に取り組むことができるような取り組みをしていく。	毎日、決められた時間の家庭学習を行っている	A:90%以上の児童ができる B:80%以上の児童ができる C:70%以上の児童ができる D:70%未満の児童ができる	・職員⑤93% ・児童⑦87% ・保護者⑦77%	・職員 ⑤100% ・児童 ⑦84% ・保護者⑦79%	B	B	B	かじこ山遊園地を改良したことによって、低学年・中学年の自主学習への取り組みがさらに増加した。また、予習の取り組みについて手引きを作成し、全校で共有することができた。予習学習ノートの取組に関する課題は、量だけでなく、質を向上させることである。次年度は、家庭の協力を得るとともに、よりよい自学ノートの姿を学校全体で共有したり、予習への取組を呼びかけることで、学習習慣の定着だけでなく、学力向上につながるようにしていきたい。
	◎	⑤読書量目標値の到達促進の取り組み (児童委員会活動、教職員や司書による本の紹介、読書カード等)	学びの基礎づくり部会 谷口	帯タイムを活用し、本を借りに行く取り組みを継続して行っている。図書館司書員や各学級担任と連携することで、児童は毎月1冊以上本を借りることができた。今後は児童がより読書に興味を持てるよう、図書委員会による読書イベントを開催したり、図書ボランティアの方たちと連携したりしていきたい。また、児童が学年に応じた本にも積極的に触れ合うことができるよう企画を工夫していきたい。	読書量の目標値を設定し、到達のための手立てが工夫されている	目標値 1~3年生 月10冊以上 4~6年生 月5冊以上 A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑥93% ・児童⑧80%	・職員 ⑥92% ・児童 ⑧77%	B	B	B	月に1回は、帯タイムに本を借りに行く取り組みを継続して行うことで、未読者はなくなった。また、読書山のぼりや図書ビンゴなど等では、児童の実態に応じて目標を変えたことで、児童が少しでも読書に取り組もうと思えるようなイベントとすることができた。読書量を増やすための取組として、今後は図書委員会を利用して本を紹介したり、学年に応じた本を紹介したりしていく。また、家庭学習の一環として読書取り入れよう各担任にも呼び掛けていきたい。
	◎	⑥補充学習の計画的な実施 (朝読書、ぐんぐんタイム、個別学習の計画的な実施)	学びの基礎づくり部会 松本	学力調査の結果を生かし、本校児童が苦手とする分野の授業改善を行っていく。どの子にもわかる授業のしかけを考え、達成率の底上げを図る。全校テストの校内格差をなくし、基礎基本の問題は全員が合格できるように補充学習を行う。	補充学習の計画的な実施をしている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:70%以上の児童ができる D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑦100%	・職員 ⑦92%	A	A	A	朝読書は全校を挙げて、静かに読書を行った。朝、心を落ち着けて学ぶ準備をすることに効果があった。3年生を対象とした九九の補習は、個別に指導することで確実に覚えることができた。5年生対象のスキルアップでは、取り残しのないように計画的に復習をすることで、弱点的克服に役立ち、学力調査でもよい結果を残すことができた。基礎基本問題の全校テストでは、すべての児童が合格できるように合格への道を計画的に行うことが必要である。
	◎	⑦学力向上プランを意識した授業づくり	学びの基礎づくり部会 松本	職員、児童ともに取り組みの意識は向上している。今後、発表する、ノートに書くなど目に見える児童の姿を検証する。目指す児童の姿を、低学年・中学年・高学年において発達段階に応じて設定する。そうすることで、目標がより具体的な姿となった。	学力向上プランの具体的な取組を行っているかの意識アンケートや検証、評価を積極的に行っている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑧100%	・職員 ⑧100%	A	A	A	「聴いて、考えて、つなげる授業」の具体的な取組を職員で共通理解をして、学校全体で取り組んだ。今後、「あたたかな聴き方」の5条「自分の考えと比べて反応する」に「変身V」を使うことを勧め、さらに授業のねらいにアプローチできるペアやグループでの話し合いになるようにしていく。
	◎	⑧3つの視点で行う授業改善	学びの基礎づくり部会 松本	本校の授業スタイルを全職員が共通理解して共通実践することができている。今年度、友達の考えに繋げて話すことができるように、変身Vを提案した。全職員が授業に取り入れている。	学びボード、アタックポイント、深めの発問の3つの視点で授業改善をしている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑨100%	・職員 ⑨100%	A	A	A	3つの視点を意識した授業を行うことができるように取り組んだ。特に、アタックポイントでは、授業のねらいにアプローチできる「図、式、言葉、話し合い」となるように設定する。「まなびボード」は、児童が自分の考えをもつことができるようにする。また、児童の考えを深め広めることができるようにする。深めの発問は、まとめを一般化できるような発問を吟味する。
⑨各種学力調査の結果を生かした学力向上改善の取り組み (4月:国、県学力調査 12月:県、市学力調査)		教務 井上	今年度の全国・県の学力テストも、県平均を上回り、学力向上の取組が成果を上げているといえる。しかし、どの教科も「説明する」問題に課題が見られる。毎日の授業で条件を整理してまとめ、分かりやすく説明する力をつけていくことが必要である。単元末に学力テストの類似問題に取り組ませるよう、年間計画に明記したり、学期末に再度取り組ませる問題を学力テストから1問選び、80%以上の正答率を上げられるように取り組んでいく。	各種学力調査の結果を生かした学力向上の取り組みを積極的に行っている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑩84%	・職員 ⑩100%	B	A	A	市学力調査の結果は、年度当初の学校目標には届かなかったが、評価問題と共にどの学年も市・県・全国と比較しても平均を大きく上回る結果であった。学年間での大きな差はなく、同一集団の経年比較の結果からも、学年が上がるにつれて力がついてきていることがうかがえる。学校全体での学力向上の取組や日々の授業改善の成果があったこととらえている。学期末に学力調査問題を検証問題として取組のふりかえりをし、課題だけでなく成果も共有しながら次年度に向けて学校全体の学力向上に取り組んでいく。	
①あいさつなど基本的行動様式の育成		心・体力づくり部会 坂井	日頃の学級指導や、道徳・学活などに加え、児童会活動を通じて、あいさつすることの大切さを実感し、主体的にあいさつできるように意識を高めていく。年間を通じて、委員会や学級・ペア学年・小高連携など、様々な関わりの中で、あいさつ運動を継続し、日常でも抵抗なくあいさつできるように仕向ける。また、外部からの来校者や校外活動などの機会をとらえ、地域で出会った人にも自分たちから、気持ちのよいあいさつを積極的にできるように事前指導する。	語先後礼のあいさつがきちんとできている	A:90%以上の児童ができる B:80%以上の児童ができる C:70%以上の児童ができる D:70%未満の児童ができる	・職員⑪100% ・児童⑨91% ・保護者⑧74%	・職員 ⑪100% ・児童 ⑨92% ・保護者⑧80%	B	A	A	あいさつに対する割合が保護者6%、児童1%上がった。わずかではあるが上がったのは、中期の結果をもとに学級懇談会で話題にあげたり、児童へ声掛けを継続してきた結果と言える。学校内では、「自分から」「立ち止まって」「笑顔で」「語先後礼」を目標に、年間を通じてあいさつ運動を行ってきた。日頃も、来校者や校外活動の機会をとらえ、あいさつすることを意識させてきたので、だんだん自分からあいさつできる児童が増えてきた。今後も家庭・地域と連携し、互いが気持ちのよいあいさつをできるようにしていきたい。	
◎	②いじめや問題行動対応の体制	生徒指導 坂井	なかよしアンケートや保護者アンケート、面談、いじめ対策委員会による現状把握と、教職員間による日頃の見取りと共通理解を継続する。児童集団の育成とともに、いじめの疑いも見逃さないように、職員間での情報交換を密に行い、いじめを見逃さない学校づくりをめざしていく。また、保護者からの相談や気にかかっていることについて、早期に確認し対応にあたる。	早期発見、解決への組織的対応をしている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑫100% ・児童⑩96% ・児童⑩96% ・保護者⑨99%	・職員 ⑫100% ・児童 ⑩97% ・児童 ⑩98% ・保護者⑨97%	A	A	A	児童を対象としたいじめアンケートを毎月行った。結果として、前期は「嫌なことを言われる・される」という女だち関係の意見が多かったが、後期になり、不満・不安等の意見が減少の傾向であった。毎月のアンケートや日頃の様子をもとに、対策委員会を開き、気になる児童についてどうすればよいか対応策について話し合った。対策委員会で話し合ったことは、全職員で共通理解を図り、場合によっては保護者に連絡するなどの対応をとってきた。今後も、児童からの小さなサインに耳を傾け、気になる児童の様子については、その日うちに職員で共通理解し、対応にあたっていきたい。	
◎	③主体的に取り組む特別活動	心・体力づくり部会 小山	これまで3回の縦割り班活動では、試行錯誤しながらも、6年生が最高学年として他学年を引っ張っていくとする姿が見られた。それが、縦割り班活動だけでなく、様々な行事や清掃などに繋がってきている。今後も引き続き高学年を中心として責任感と自覚をもたせていくように、さらに教師の出る場面を減らして主体性を高めていく。	主体的によりよい学校生活を築こうとしている	A:90%以上の児童ができる B:80%以上の児童ができる C:70%以上の児童ができる D:70%未満の児童ができる	・職員⑬100% ・児童⑪96%	・職員 ⑬100% ・児童 ⑪97%	A	A	A	年6回の「たて割り班なかよし会」を実施した。当初の計画では、昨年度より1回増やして7回の予定ではあったが、12月のインフルエンザの流行により中止となった。6年生が下級生をリードし、優しく教えてあげる姿がとてよかった。その6年生の姿を模範として、5年生も最後の縦割り活動を実行することができた。毎日のたて清掃でも、6年生が中心となり、昨年度から始まった無言清掃を1年を通してすることができた。	
◎	④道徳科の指導の充実	道徳推進 鞠山	重点項目について児童に意識化させるため、昨年に引き続き、行事作文にめあてと振り返りを書くようにする。昨年度の自己点検シートを学年ごとにまとめ、今年度の授業の参考にできるようにするとともに、自己点検シートの活用を継続していく。	自己点検シートを活用した道徳授業を行っている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑮100%	・職員⑮100%	A	A	A	事前をめあてを書かせ、行事に取り組んだことで、教師だけでなく、児童も、重点項目に対して意識し、行動することができた。昨年度の自己点検シートや授業記録を参考し、今年度の授業を展開していくことができた。また、今年度の実践記録をまとめ、来年度の授業のむけ実践記録を継続していく。	

	◎	⑤全体計画別業と関連づけた道徳授業の工夫	道徳推進 鞠山	行事の写真を掲示し、学校生活と価値項目との関連を児童が気づけるようにする。 年4回ある授業参観のうち、1回は全校一斉で道徳の授業を公開する。そこでGTとして、地域人材を活用し、より充実した道徳教育を目指す。	「いしかわ版道徳教材」や保護者や地域人材を活用した道徳授業の工夫をしている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑩72%	・職員⑩100%	C	A	B	道徳教育の全体計画別業に「関連資料・ゲストティーチャー」の欄に、「いしかわ版道徳教材」の活用やゲストティーチャーの招聘を位置づけ、地域のおよき人材から、豊かな心の育成を図っていく。
	◎	⑥個別の指導計画や教育支援計画の作成と有効活用	特別支援 コーディネーター 山原	校内特別支援委員会で情報交換し、共通理解したことで、複数の目で児童の変化を迅速にとらえ対応することができた。また、児童へのプラスの言葉かけも増え、児童の自己肯定感も高まった。専門機関と連携したことで保護者も含め、多面的に支援方法を考え、同じ方向性を持って支援にあたることができた。今後も、情報交換を密にするとともに、支援計画が有効活用できるよう、来年度に向けての引き継ぎを行うとともに、中学校、幼稚園、保育園との引き継ぎも行い、支援が継続して行われるように取り組んでいく。	個別の指導計画や教育支援計画を作成し、有効活用している	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑩92%	・職員⑩100%	A			個別の指導計画・支援計画を作成するだけでなく、学期ごとに更新し支援の見直しを図ることのできている。校内特別支援委員会や終礼などで定期的・臨時的に児童の様子や支援方法について確認・共通理解したことで学校全体で同じ方向性を持って支援することができている。適切な支援で児童の自己肯定感の低下を防ぐこともできた。来年度も効果的な支援を引継ぎ、継続できるよう、切れ目ない支援めざして取り組んでいく。
3.		健やかな 体と危機 管理の育 成										
		①基本的な生活習慣の定着(早寝・早起・朝食の定着)	保健主事 脊戸	5月の生活カレンダーでは、目標時間(低学年21:30、高学年22:00)が守られた児童は、低学年が70%(昨年75%)、高学年が65%(昨年67%)とどちらも下がっている。担任と連携して、早寝早起きの生活リズムを整える必要性を、指導していく。	早寝、早起、朝食の習慣が身に付いている	A:90%以上の児童ができる B:80%以上の児童ができる C:70%以上の児童ができる D:70%未満の児童ができる	・職員⑩100% ・児童⑩72% ・保護者⑩70%	・職員 ⑩100% ・児童 ⑩67% ・保護者⑩63%	C	D	D	生活リズムについての学級指導を長期休暇の前に行ったが、中間集計より結果はよくなかった。長期休暇後は生活リズムが崩れやすいので、長期休暇に入る前や、生活リズム調査の実施時期などの機会をとらえて、児童のみでなく、保護者への啓発活動を行うことで、早寝早起き朝食の習慣の改善を図りたい。
	◎	②体力・運動能力調査の実施・分析・取組	心・体力 づくり部会 重政	新体力テストの結果から、6年生は男女ともすべての運動項目で県平均を上回ったが、4、5年生においては、長座体前屈、握力、50m走等で県平均を下回った。総合評価においてもAB群は61.2%、C群が25.9%となっている。今後は、県平均を下回った項目の記録向上に向けて、体育担当者で連携を取りながら、体育の授業を中心に運動の機会を設定し、取り組んでいく。	体力・運動能力調査による課題の取り組みを行っている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑩100%	・職員 ⑩84%	A	B	A	本年度の新体力テストの結果から、課題となった項目を体育担当者等で共通理解し、授業改善をしたり、掲示物を新しくしたりする等学びの環境を整えることができた。2学期末に4、5年生で行った長座体前屈の追跡調査では、平均で約4.1cm記録を伸ばすことができた。来年度は、引き続き長座体前屈や握力、50m走が本校の課題である。それぞれの力を高める運動を今年度中から体育の授業で取り入れていくようにする。また、スポチャレ等の取組を通して、児童の基礎体力向上を図り、その学年に応じた体力が身に付くようにしていきたい。
		③いじめのない温かい人間関係づくり	心・体力 づくり部会 坂井	日頃の授業や活動で見つけた児童のよさを具体的に伝え、児童の自己肯定感を高めていく。また、児童会の取組「かがや河井っ子」を継続し、学級内外の児童が見つけたよいところを互いに伝え合い、温かい関係づくりをめざす。	いじめ調査、QUNアンケートや個人面談の実施している	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑩100% ・児童⑩95%	・職員 ⑩100% ・児童 ⑩99%	A	A	A	年2回、QUNアンケートを実施し分析をした。それをもとに児童理解会議を開き、全職員で気になる児童について共通理解を図り、みんなで全児童を見守る体制ができたことがよかった。学級では、児童のよさを伝える場を設けたり、適時、伝えたりすることで、2回目のQUNアンケートでは承認得点が上がってきた。児童会の取組でも「かがや河井っ子」の取組で互いのよさを見つけたり、伝え合ったりすることで温かい雰囲気が生み出されている。職員間の共通理解と児童間の認め合いの活動を継続していきたい。
	◎	④通信機器利用の指導と実施	心・体力 づくり部会 坂井	通信機器の所持率が高まっている現在、「持っているなら、正しく使う」また「どう管理するか」を指導する必要がある。そこで、今年度は、1学期に全校児童と保護者を対象に、非行被害防止講座「ネット・ゲームに潜む危険」を開催した。その他、学校だよりで通信機器利用に関する注意喚起を行っている。今後は、学年に応じた内容で学級指導を行ったり、学級懇談会で問題提起し、共通した約束事などを話し合ったりすることも必要である。	ネット端末5つの指導と約束が守られている	A:90%以上の児童ができる B:80%以上の児童ができる C:70%以上の児童ができる D:70%未満の児童ができる	・職員⑩100% ・児童⑩86% ・保護⑩70%	・職員 ⑩100% ・児童 ⑩85% ・保護者⑩67%	B	B	B	6月には、奥能登教育事務所の指導主事を招聘し、親子教育講演会を開催した。通信機器利用による弊害について学び、親子で考える良い機会となった。「インターネットを通じて行われるいじめへの対応」に関しては、「ネット依存」「SNSでのトラブル」について、親子講演会で児童・保護者に直接伝える機会をもつことができた。また、ホームページに「学校いじめ防止基本方針」ならびに「ネット端末5つの約束」を載せて全保護者への周知を心がけるようにしてきた。しかし、講演会や懇談会に来られなかった家庭もあり、周知の徹底・意識の向上は難しいのが現状である。今後も、学校からフィードバックや情報モラル教育について発信を継続し、各家庭で考えてもらう時間、機会を多くとっていく必要がある。
		⑤事故の未然防止と発生時における職員相互連携による迅速な対応	心・体力 づくり部会 坂井	日頃から、登下校に関する安全指導を行っている。不審者や天候による危険性などについては、迅速に対応し、保護者への通知と児童への注意喚起を行ってきた。下校時に寄り道をする児童や公園などで危険な行為をしているなど通報等があった際には、複数の職員が出向き指導するとともに、保護者にも連絡した。また、各学級でルールの再確認をするなど学校全体で共通の指導を行っている。	安全指導の実施と事故発生時の職員相互連携による迅速な対応を行っている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑩100% ・児童⑩98% ・保護者⑩98%	・職員 ⑩100% ・児童 ⑩98% ・保護者⑩100%	A	A	A	下校の約束や児童玄関周辺・通学路に関する安全指導を日頃から継続して行ってきた。また、交通安全や公共の場での使い方に関して、外部からの情報を得た時には、早急に職員が連携し、事実確認を行い指導をした。また、危険な行為に関しては、家庭へ連絡し事実報告と協力を依頼し、安全に関する意識を高めてきた。今後も、学級活動や課外活動の機会をとらえ、児童へ安全への声掛けと事故の未然防止に努めていきたい。
4.		教育指導 力と組織 力の向上										
	◎	①学校研究の実践(聴いて、考えて、つなげる授業づくりの推進)	学びの基礎 づくり部会 松本	前期は話を「聴く」ことに重点を置き、全職員で共通理解して取り組んだ。アンケート調査の結果、前期では87%の児童が「あたたかな聴き方」を意識することができていた。今後、児童が友達の話聴いて「なるほど!」「どうして?」を見つけれられるようにしていきたい。	研究主題の実現に向けて共通実践を積極的にやっている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑩90%	・職員 ⑩100%	A	A	A	聴いて、考えて、つなげる授業を全職員で共通して取り組むことができた。友達の話聴いて、「変身V」で反応することで、児童の授業態度の基盤が整い学習への意欲が上がった。また、聴くことで自分の考えが広がり深まったことを実感できるようになった。
		②校内研修の充実(外部指導者招聘、校内研究会の活性化、外部研修への積極的参加と還元等)	学びの基礎 づくり部会 松本	情報教育研究大会が本校で行われることが決まっており、校内のICT環境の向上を目指して、外部講師を招き、職員を対象としたタブレットや無線LANの基本的な使い方等の講習が行われた。また、指導主事要請訪問では、ICTを用いた体育科と総合的な学習の時間の授業について検討を行った。今後、さらにICTを用いた授業の活用を検討していく。	校内研修を通して、授業力向上に取り組んでいる	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑩100%	・職員 ⑩100%	A	A	A	県視聴覚研究大会での本校の公開授業は、先進的な内容の授業として参加者から高く評価された。その後もICTを積極的に取り入れた授業を展開している。授業の導入で児童が正確に、授業を飛ばずに児童が問題をつかむことができるようになるためには、ICTが有効である。また、書画カメラで児童が操作活動をしている様子を大型テレビに映すこともできる。児童のねらいの達成のために、今後、有効な使い方を情報交換していく。
		③校務分掌や担当の責任の遂行	教務 井上	新しいメンバーや若手教員にも、周りの協力体制のもとに担当を分掌して組織的に取り組んでいる。また、各取組の実践後には必ずふりかえりをし、来年度への申し送りとして共通理解をしている。これからは昨年度の反省点を生かすと共に、新しい視点で活動を見直すよう心がけ、後期の取組を進めていく。	学校参画意識と組織の活性化に向けた取組を積極的にしている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑩100%	・職員 ⑩100%	A	A	A	全員が高い参画意識をもち、協力しあって校務に取り組んだ。働き方改革やOJTの視点ももちながら、より効率的に取組を進めることができた実感できる1年だった。機能化システムの見直しを経て、新年度からもチームワークを生かして取り組んでいくことを共通理解する。
		④時間外勤務時間の削減の工夫	教頭 宮本	昨年より働き方改革の一環で時間外勤務の削減に取り組んできた。4月は、前年比-16時間、5月・6月は、-19時間と意識改革は進んでいる。しかし個別に見ると時間外が多い教諭もいる。仕事量が減らない中で削減は難しいが、勤務の効率化を工夫し、更なる削減を図りたい。	時間外勤務削減の取組を積極的にしている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑩78%	・職員 ⑩86%	C	B	B	4月～1月までの時間外勤務時間は、平均4.1時間であった。前年同時期の平均は、5.2時間であり、実に平均1.1時間の削減に成功している。過労死ラインの8.0時間を超える教職員は、ここ数年は0であり、教職員の意識改革が進んだ結果である。教職員が健康であることで、子どもたちにベストな教育環境を創出できると考える。
5.		開かれた 学校づくり の推進と 連携										
		①教育活動の積極的公開と情報提供(学校だより、学年だより、学校ホームページ等)	教頭 宮本	保護者評価・職員評価も高評価であった。学校としては、HPの更新、学校だよりの発行などに力を入れており、HP閲覧数も大幅に伸びている。各学年・学級だよりでは、担任・学年で多少の差異はあるが、学級の状況を努力して伝えている。それらの結果がこの評価に繋がっていると考える。保護者・地域開かれた学校の観点からも、更なる情報発信に努めたい。	学校・学年・学級だより、学校ホームページ等を通して学校情報を発信している	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑩100% ・保護者⑩96%	・職員 ⑩100% ・保護者⑩99%	A	A	A	第2回目も保護者評価・職員評価も高評価であった。学校としては、HP担当がタイムリーに記事を更新できている。日々閲覧数が伸びるのは、毎日の給食や行事記事など継続した更新がなされているからである。また、見やすい、興味をもちやすい学校だよりの発行を心がけており高評価を頂いている。学年・学級だよりでは、各学年・担任が工夫して学年・学級の状況を伝えている。それらの結果がこの評価に繋がっていると考える。保護者・地域開かれた学校の観点からも、更なる情報発信に努めたい。
		②PTAや公民館活動など家庭と地域の連携	教務 井上	肯定評価がやや低いのは、1学期に地域人材を生かした活動がない学年があったためだろう。例年多くの地域人材に活躍していただいているが、今年度は、「合唱の集い」に向けて、地元音楽家、仲谷響子さんに5年生の歌声づくりの指導に来ていただいている。4年生の児童質問紙でも、地域の方や専門家が来てくれる学習が好きだと答える児童の割合が高く、さらに地域との連携ができるとよい。10月5日(土)にPTA主催の「河井waiwai大作戦」が提案された。PTA各委員会が連携し、バザーと子どもたちを楽しませるイベントを行う準備が進められている。	地域人材をいかした活動をしている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑩79% ・保護者⑩77%	・職員 ⑩100% ・保護者⑩63%	C	B	B	総合的な学習や道徳、音楽、生活科など様々な場面で地域の人材や教育力を生かして授業や活動が行われ、職員の自己評価は100%となっている。PTAの親子行事や2年連続となったバザーの内容など、子どもたちの成長を願う保護者の積極的な働きかけもいただけて充実感のある1年だった。保護者からの評価が低いことについては残念であるが、活動内容や成果についての発信の仕方についてさらに工夫していくことを来年度の課題とした。
	◎	③幼保小及び小中連携の推進(情報交換による相互理解、園児・児童・生徒の交流活動の実施)	教頭 宮本	幼稚園・保育園だよりや、中学校の学校便りを掲示し、連携やつながりの見える化を継続していく。また、学校行事には、関係者を招待し、連携を深めてきた。幼保小連携に関しては、11月に学校コンサートを近隣の幼保の年長児を招いて実施する。また、3月には入学予定者の体験入学を行い、交流活動を深めていく。小中連携に関しては、小中連絡会や計画訪問での相互参観を実施し、情報交換をした上で子ども達のよりよい姿を求めて共通行動を揃えたり、方策を考えたりする。また、中学校の入学説明会にも参加し、授業体験をしたり、説明を聞いたりしながら、交流活動を深めていく。	幼保・中学校との情報交換会、交流活動、行動連携を積極的にやっている	A:よくあてはまる (90%以上) B:だいたいあてはまる(80%以上) C:あまりあてはまらない(70%以上) D:まったくあてはまらない(70%未満)	・職員⑩85%	・職員 ⑩100%	B	A	A	来年度も幼・保・小、小・中・高連携を意図的に組み込みを連携を深めていきたいと考えている。幼・保・小の連携では、毎月のお便り交換・掲示によりお互いの情報を知ることができる。小学校行事への園長・所長さんの臨席を願ったり、年長児との交流を図っている。児童の情報交換も行き、常に意思疎通できる状態を継続していく。中高との連携では、輪島中学校との授業相互参観、整理会の参加、主任との情報交換会を継続して行い。また、輪島高校との合同あいさつ運動、高校教員の授業参観要請など、中高との連携を深めていきたいと考えている。